

泳ぐ焼き魚	死因は二次放射能障害	白魚	原爆忌を迎えて	濡れた千羽鶴	ヒロシマの遺臭	朝日新聞記事
-------	------------	----	---------	--------	---------	--------



## 白魚（しろうお）

(婦人公論, 1954年4月号)

雪枝の住んでいる町は、広島からほど近い静かな田舎町だった。その町と隣の村との間には、綺麗な川がのびのびと流れている。

雪枝親子がこの土地に移り住んでから、この春を迎えて、既にまる三年を経過した。

それまで広島にあった彼女たちの家は、戦争末期の、本土空襲がようやく烈しくなり始めた頃、強制疎開になったので、雪枝の父が八方に手蔓を求めて、やっと今の家を見つけたのだった。そしてその夏、広島は一瞬にして焼けてしまった。雪枝の父もその日から、二度と帰らぬ人となってしまった。

その翌春、雪枝は女学校を卒業して、町の銀行に勤め始めた。雪枝の母は近所の娘達に。お茶や、お花を教えて生活の道をたてていた。

この付近の農家は、米や麦以外に、金になると見れば、何でも手をつけた。家々には、鶏や、山羊、豚、兎などが景気よく飼われている。夏になれば、川が海に注ぐ辺りの白い砂地に笹竹をたてて、海苔を採るのに忙しい。秋には、柿、栗、松茸などで、また金が入る。

雪枝の母が、この様な土地で、茶道や、生花を教えて暮しの助けとなるのは、その安い月謝よりも、むしろ方々から貰う、米や、その他、様々な農作物のおかげだったといえよう。

旧正月が過ぎると、金儲けの面白い人々には、また結構な仕事がある。暦は立春となっても、まだまだ外は寒い風が吹く。そのような寒い夜を、この人達は川べりに明かして、白魚をとった。一間四方もある網を川底に沈めて、その上にランプで魚をおびき寄せ、沢山集まったところをすくい上げるのである。次の朝には、白魚は高い値段で料理屋に売れた。広島まで持って行けば、更に良い値で売れるという。この白魚がとれ始めた頃だから、まだ吹く風は身にしてみても冷たかった。

ある日、雪枝が勤めから帰って来ると、台所に誰か来ている気配がする。

しばらくすると、客は帰ったと見えて、母が座敷に入ってきた。

「おや、お帰り」

雪枝はコタツに入ったままで「ただ今ア」と答えた。母もコタツに坐った。

「誰アれ？ 今の人……」

「あれかい、あれは木村さんだけど……」と母親は妙な笑い方をする。

「何アに？ 何よ」

「いえね、実は、白魚を貰ってねえ……」そういって、母親は眉を寄せて見せた。

「あら、いやだわ」

雪枝も困ったように苦笑するのだった。

昨年の中頃、やはり近所から白魚を貰ったことがある。その時、それを持ってきたお爺さんが、白魚の料理の仕方まで喋って帰った。

それによると、鍋の中に豆腐と水を入れてその中に白魚を泳がせる。その鍋を火にかけると、水は次第に沸いて来て、白魚はその熱にたまりかね、冷たい豆腐の中に体を潜り込ませてしまう。そうして沸騰した後、或は味噌汁にしたり、又は湯豆腐同様にさせていただくというのである。

「何ちゅうても、これが一番旨いけえのう」といってその人は笑った。

母の横でそれをきいていた雪枝は、そのときふと、広島空襲のことを思い出していた。

あの八月六日の朝、雪枝は父より一足早く家を出た。原子爆弾の炸裂したのは、広島女学院に着いた頃だった。幸い、街外れに近い学校だったので、そこは殆ど被害はなかったけれども、瞬くうちに、街の方々からは火の手があがってきた。

雪枝は母の心配が思いやられて、学校の許可を得ると、遠く道を迂回して、わが家に帰った。もう夕方近かったが、父はまだ帰っていなかった。

その夜、二人はまんじりともしなかった。彼女の家の窓からも、広島空の真赤に焦げる様子は、眉毛に熱いほど眺められた。

翌日、母と子は、その町からの救援トラックに便乗して、焼け崩れた市街を、父親の歩いたであろう道順を辿って、探し歩いた。会社のあったビルは惨めな残骸をさらしていたが、そこに父のいた形跡はなかった。道々に横たわる死体も一々注意してみたが、どれもこれも見覚えがなかった。

もしや自分達の留守中に帰ってきてはいないかと、夕暮れに家の門を潜ったときも、二人は悲しく失望しなければならなかった。

次の日もその翌日も、焼跡へ探しに出かけた。負傷者収容所は氾濫しに覗いてみたが、そこにも父の姿はなかった。

まる十日ばかり、或いは母と子で、或いは単独で、心当たりを探して廻った。

しかし遂に、父はその行方さえ分からなかった。はじめは、雪枝達にとって、父の死体の見つからないのは、せめてもの希望の綱だった。所が、十日、二十日と日が経ってしまえば、それもはや諦めなければならぬ。親戚の者はしきりに、市役所で分骨を貰って葬式を出すようにとすすめる。母と子は、不承々々にその言葉に従うより他に仕方がなかった。

白魚と豆腐の話聞いた雪枝は、あの子の焼跡の様子を、まざまざと思い浮かべたのだった。

街路には、家は焼けてその影もなかったが、各戸毎に、門戸に備えた防火用水の水槽だけは空しく水をたたえたままに残っていた。そしてその水槽の中には、悉く、火傷を負った、男や、女が、水に浸ったまま醜く死んでいた。逃げのびた人の話では、裸の男女が川べりで、川の水をばちやりばちやりと、浴びていたという。それを裏書きするように、焼けた街を歩けば、七つの支流にかかるそれぞれの橋の周りには、水にむくんだ死体が、洪水のあとの材木のように、互いにひしめいていた。雪枝はそれらの死体にも、もしやと思う視線を注いで通ったのである。その時は気味悪いとも感じなかった。どのような無惨な死体にも、瞳を凝らして、真直ぐに見ることができた。しかし父はどこにもいなかった。

雪枝は全身火達磨の人々が、防火用水に飛び込む様子も、火傷の熱い体を、川の水で冷やす光景も、鮮やかに蘇らすことができた。それらを、白魚が煮えたぎる熱湯にたまりかねて冷たい豆腐にもぐる心と、同時に考え合わせて、急に戦いたのである。だから雪枝は、すぐあとで母にその話をした。

父を失った親子には、井に折り重なってうごめく白魚が、哀れな、悲しい姿の象徴のように見えてくるのであった。

雪枝はその日、そうとう川に魚を逃がしに出かけた。白魚の料理は、勿論その他にもいろいろある。それまでもおいしく口にした経験もあった。しかし、それ以後は、白魚といえば、豆腐。従って火傷・防火用水と、一連のうちに思い出されて、どうしても、買う気にも食べる気にもならないのであった。

それに今年もまた、白魚を貰ったという。

「いやあね。沢山貰ったの？」

「見てごらんよ、台所にあるから」

雪枝はすぐに台所を覗いてみた。流しの上に井が置いてある。その中には白魚が重なり合っ

てうごめいていた。

「生きがいいのね」

「そうだよ。どうしよう」

「どうするって、私、やっぱりいやだわ」

「じゃ、捨てるかい？」

「だって仕方ないでしょ」

二人は顔を見合わせて苦笑した。

「勿体ないねえ、折角、丁寧にお礼迄いって貰っておきながら」

しかし、所詮二人には白魚を食べる勇氣はなかった。

「網が近くにない所に放しておやりよ」と、出がけに母が注意した。

雪枝は、井を風呂敷に包んで家を出た。道を折れると、すぐ畠になる。畠にはもう麦が出揃っていた。坂をあがるともうそこが川だった。石段があって水際まで下りている。雪枝は水に近くうずくまって風呂敷を解いた。何か悪戯でもするような気がして、そっと辺りを見廻してみた。頬にはひとりでに微笑が浮かんでくる。近くには誰も人影はなかった。

岸に近い水は、殆ど静かで流れさえもない。雪枝はその水面に、波紋すらたてぬ手つきで、やさしく白魚を水にすべり込ませた。水の中に一旦沈んだ魚は、そのまま再び水面に浮いてきた。そうして暫くはじっとして動かない。彼女は、もう死んでいるのかと眉をひそめて眺めた。しかし魚は、冷たい水に次第に元気よく体を泳がせて、遂にはその辺りに一匹も姿を見出せないまでに散り去ってしまった。雪枝はなおも水を覗き込みながら、二度と網にかからぬようにと心に軽く祈った。

空の井は川の水でぎっつとゆすいだ。

陽は山の端にかかって、夕焼けは西の空に美しい。彼女は掌を夕陽にかざしてみた。指は赤く陽に映えて、川風が凍りつくように吹いてくる。しかし手は爪先までぼかぼかと温かった。立ち上がって、田んぼ道を急ぐ雪枝の頬も赤く明るく、輝いて見えた。

\* \* \* \* \*

(後記) これは、原爆の跡を歩いた記憶を、大学学生時代の結核療養中に、小説風に書いて母の名で投稿した文章である。選者は川端康成であった。

戦後はまだ食糧の貴重な時代であったし、広島市の近くの山では松茸も結構採れていた。いまだに白魚を食べることができないのは、筆者および重傷を負いながら生き延びた今は亡き母の実体験でもある。

母を捜して歩いたときに眺めた水槽や川に、冷水を求めたあの多くの死体の声なき声を払拭することは生涯できそうもない。家族を行方不明のまま失なわれた方々は、その後どのようにその記憶と共に暮らしていかれたのであろうか。

元安川：川岸にも橋桁にも白い無数の死体が群がり来っていた…

今でも原爆ドームの前から川に降りる石段が何箇所もあるが、それらの石段を降り砂洲から川に入った人

たちで、川面はいっぱいであった。(元安川は広島市を流れる太田川の7つの支流の一つである)



注：この地方でいう「白魚」は、ハゼ科のシロウオ(素魚)のようであるが、あまり一般的でない漢字表記なので「白魚(シロウオ)」とした。尤も、シラウオもシロウオも早春(四つ手網)で漁がされ、透明な体は煮ると白くなり、調理法も共通している。

泳ぐ焼き魚	死因は二次放射能障害	白魚	原爆忌を迎えて	濡れた千羽鶴	ヒロシマの遺臭	朝日新聞記事
-------	------------	----	---------	--------	---------	--------